

# 21PO-am414

副作用報告ができる薬剤師輩出を目指して 第1報 ～薬学4年生の現状と新規AE実習導入による効果～

○矢野 裕士<sup>1</sup>, 奥村 伊代<sup>1</sup>, 江川 裕之<sup>1</sup>, 吉澤 美香<sup>1</sup>, 岡本 祐二<sup>1</sup>, 山村 美保<sup>2</sup>, 畦地 拓哉<sup>2</sup>, 鈴木 優司<sup>1</sup> ( <sup>1</sup>東海大大磯病院薬, <sup>2</sup>星薬大薬学教育研セ実務教育研究部門)

【目的】当院では薬剤師会と有害事象（以下AE; Adverse Event）報告の活性化を目指した薬学連携を展開、また薬学実務実習生に対するAE報告研修を実施している（第28回日本医療薬学会年回にて報告）。今回薬科大学と協力し実務実習前の薬学4年生に対しAE報告実習を実施し、参加した薬学生の理解度や研修効果についてアンケートを用い解析したので報告する。

【方法】対象：2018年10月2日星薬科大学での実習に参加した薬学4年生291名  
内容：医薬品安全性情報報告の現状とその重要性に関する教育と医薬品安全性情報報告書（以下報告書）の記載方法、模擬症例での報告書記載を個人およびグループで検討。実習前後の理解度等をアンケート調査した。

【結果】AE報告制度については79%の学生が大学で教育を受けていると回答した。実習前/後の理解度を5点満点で集計したところ、①AE報告義務が3.6/4.2、②RMPが2.6/3.9、③重篤副作用疾患別対応マニュアルが2.2/3.9であり、実習後にはそれぞれの理解度が大幅に向上した。96%の学生が本実習で理解度が向上したと回答した。安全性情報報告制度やRMP等についてどのように教育・周知すべきかの問いには、92%の学生が大学で実施と回答した。

【考察】本実習は96%以上の学生の理解度が向上したことから有益であった。理解度向上の要因として、座学だけではなく、臨床現場の薬剤師が実臨床に則した形で指導し、実際に報告書を記載する「体験」を取り入れたことが大きいと推察される。また、現状の大学教育のみではAEに関する情報が十分理解されていないことが明らかになった。本実習は大学での基礎教育の理解度を深め、より実践的なAE教育を受ける契機になり得るため、各大学での積極的な導入が求められる。